

まちづくり ひろしま

第36号 (平成30年7月15日)

読者数：619名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

このたびの西日本豪雨によりお亡くなりになられた方々のご冥福を深くお祈りいたします。また被災された方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

様々な形でまちづくりに関わってきている私たちにとって、今回の災害は痛恨の極みであり、今後少しでも必要な政策提言や対策の支援に関わっていくつもりです。

皆様とともに、被爆、土砂災害を乗り越えた新たな広島を作り上げていきましょう。今後ともよろしく願います。

編集委員一同

□ 巻頭言

なにごとにも目標がなければ動きにならない

中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之



ところで今の広島のまちづくりの目標(マスタープラン)はどうなっているのでしょうか。総合計画として基本構想のもと第5次広島市基本計画(2020年目標)や都市計画マスタープラン(2030年目標)などが決定されてはいますが、果たしてこれらはまちづくりの基本となっているのでしょうか。それぞれ、諸制度でがんじがらめにされ、すべてのことを盛り込むこととなり、まちづくりの進行管理すらできず実効性のあるものにはなっていません。そのため、マスタープランは、ますます市民から遠くなってしまい、ひとりひとりの行動につながりません。市民にとってなんのための計画か、見失ってしまっているのではないのでしょうか。

みんなが考え、議論し、英知を結集するためには、マスタープランは必要です。ただし、実行されないマスタープランでは却(かえ)って弊害となります。

広島中央公園地域に限って見てみましょう。商工会議所の移転問題、旧広島市民球場跡地の活用問題、古くなったバスセンター、裏側を見せている商業施設や事務所ビル、耐用年数が迫る多くの公共建物など問題が山積みで、最近では、プロサッカー場整備が中央公園と隣接する基町住宅の在り方まで言及する始末。これほどの課題を抱えながらもこの地域のまちづくりの目標(マスタープラン)は見えてきません。この場所は、私たちのまちの中でどんな役割を果たしていくべきなのか、そのためにはそれぞれがどんな課題を担うのか、またどんな順番や組み合わせで解いていくのが議論され、決定されることが必要ですが、いっこうに具体化していきません。

人口減少社会が到来して成熟社会に向い、都市は個々の特質を活かした発展を持続させるための仕組みが求められています。また一方で自然災害は年々巨大化、激甚化し、安全への備えも必要となっている他、超高齢化社会への対応、環境共生、コミュニティ再生など、都市政策上の課題は多様化・複雑化しています。

昨今、「プレイス・ベスト・プランニング」(小さな場所から始めるまちづくり—自然に人が集まり、交流が進むような魅力的な空間を作る)という計画手法が注目され、マクロな分析視点と並行して、ミクロなコミュニティの視点から計画を組み立て、都市を改善しようという動きが出てきています。都市成熟の時代において、まちづくりのあり方や視点を大きく見直すべき時期に来ていると考えられます。併せて、市民や企業の動きも以前とは



カナダ・バンクーバーの事例

変わり、様々な場面で官民連携が進み、市民活動も都市空間の中で様々なアクションとして展開しつつあります。いまから具体的にできることから始める。プレイス・メイキング（場づくり）やタクティカル・アーバニズム（仮想空間志向のまちづくり）などの動きは、公共空間を戦略的視点から改善し、都市を有効に活用しようとする新しい動きとなります。このような背景から、地域の基本理念を守りながら、今までにはないタイプのマスタープランの導入が求められます。

あなたは最近、広島中央公園に行ったことがありますか？いや、これまで何回くらい行ったことがありますか？そこに何があるか知っていますか？

中央公園は、戦後新しく平和都市を建設するという広島のまちづくりの思想に基づいて、現在の平和記念公園と中央公園が一体となった平和記念公園として整備するとされた歴史があります。こうした地区のDNAを踏まえながら「プレイス・ベスト・プランニング」の空間として広島中央公園を考えてみると宝の山です。元安川は瀬戸内や世界の海につながり、河岸は雁木などの親水空間やところどころにひろばスペースがあります。よく育った木々は緑のいこい空間となり、全体に大気の流れをつくりだしています。やがて再整備される公共建物は、内外の世代を超えた利用者にこたえる可能性を秘めています。

そもそも広島中央公園は平和記念公園との関連を持って、広く世界から訪問客を迎え入れる広島の中心的な憩いの空間であり、世界にも自慢できる広さと内容を持ちうる都心の公共空間です。ここを新しいタイプのまちづくりの場としていきたいものです。

まちづくりなんて言わなくて済むように当たり前になるといいですね。被爆後 100 年に、目指したまちになっているためには、今ここに暮らす私達がまちづくりを叫ばなければなりません。そして少しずつつながって、少しずつ広がってまちづくりはできていきます。平和もそうですね、未来も平和な時代が来ると信じて今、平和を叫びます。そして振り返ってみると「あー、みんな同じところを目指していたんだね」と気付くのです。

ひろしまのまちづくりの動き

① サッカー場候補地、基町地区住民説明会開く！

広島市・県・商工会議所の3者は6月24日、基町地区の住民説明会を開催し、地域活性化などの方向性を示して中央公園のサッカー場候補地としての理解を求めた。

地元住民団体から2月に中央公園へのサッカー場建設反対の要望書提出を受けて、生活環境の悪化やまちの将来像が見えないなど、まちづくりへの住民の不安を解消するのがねらいである。

市側からは、基町地区を「戦後の復興を支えてきた街」から「更なる発展を牽引する街」へと転換させ、市営住宅の入居条件を緩和して若い世代の定住の促進や宿泊型の高齢者向け福祉・介護施設の整備など、基町地区の振興策を提示。またスタジアムが整備された場合の騒音や渋滞への対策も説明。解体済みの県営基町住宅跡地はオープンスペースとし、憩いの場や防災拠点とすることも示す。

それに対して住民側からは「基町地区が繁華街になることを望んでいない」など反対意見が多く出たが、地元住民との協議会を設置して議論を続ける必要性については一致し、今月にも設置予定。



中国新聞(2018. 6. 23)

(コメント)

基町地区の振興策と中央公園のサッカー場建設がどう絡むのかが解せない。基町地区に飴を与える代わりにサッカー場建設を飲んでくれと取引しているようにも見える。会場でも「少子高齢化は喫緊の課題であり、サッカー場問題と絡めず対策を取るべき」との意見が出たが、その通りだ。もし中央公園と基町地区とその周辺を合わせた全体像が提示できれば、暗いトンネルから抜け出すことができるであろう。

○ 広島復興の軌跡・人物編（第11回）～竹重貞蔵県都市計画課長～Part 2

～県職員として当初の広島市の復興計画に関わり、そこで基本的方針が確定された～

引き続き竹重課長について記述をしよう。（以下敬称略とする）

なお、竹重貞蔵は明治38年福岡県生まれ、昭和18年6月広島県土木部都市計画課長として福岡県から赴任し、昭和22年5月に愛知県に転任している。昭和20年12月からは西部復興事務所長も兼務している。平成9年没、追悼記事が日本都市計画学会発行「都市計画」第210巻に掲載されている。



都市計画委員会での幹事説明

当時都市計画は現在の都市計画審議会の前身である都市計画委員会で審議され決定されていたことは既に述べたとおりである。前回公園計画の説明を引用したので、今回は必ずしも一般に十分に認識されているとはいえない道路計画について敷衍（ふえん）したい。昭和21年9月16日に開催された第39回都市計画広島地方委員会の議事録によれば（旧仮名使いは変更）、竹重貞蔵広島県都市計画課長による幹事説明において、

「広島市の将来の性格をどういう風に考えて参りますか、従来の軍都と致しましての特異性はなくなつたのでございますが、原子爆弾に依りまして世界平和の一転機を作りました。即ち市と致しまして平和都市・文化都市と致しまして今後発展せしめることは勿論のことでございますが、又広島県の仕事と致しまして、更には中国地方の政治経済文化の中核都市と致しまして今後発展をなすべきものであると思うのでありますが、（以下略）」

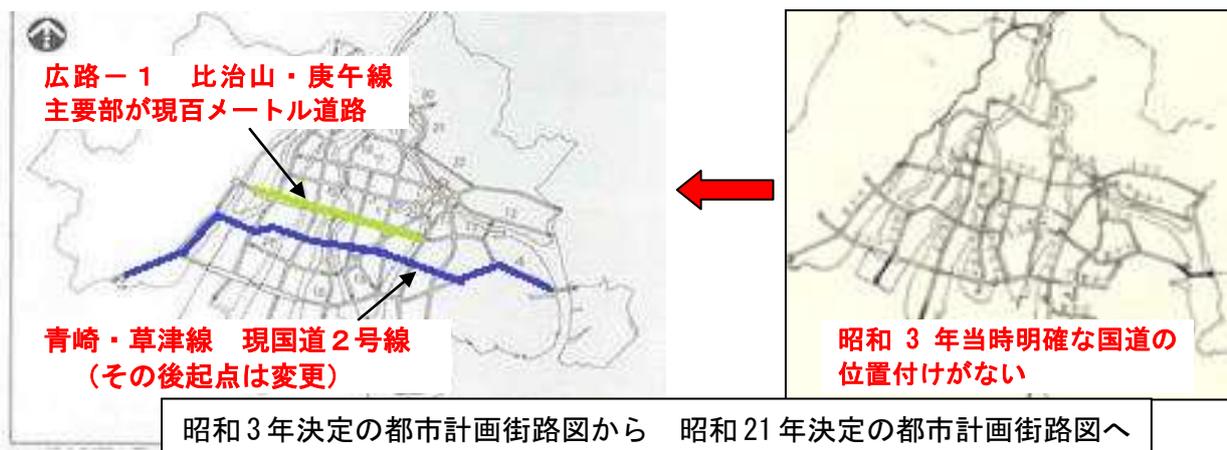
と簡潔な言葉で計画背景に言及して、都市計画街路のネットワークの説明に移り、まず、

「此の内での真中に大きな線が行ってまいります、これは広路第一号でありまして東の方比治山と西の方の己斐とを結びまして防災道路を兼ねまして美観的な緑地とこういう風に考えているのであります」

と、百メートル道路の意味を的確に説明している。さらに国土幹線道路として、

「第二号国道が現在これから向洋の駅前からこちらの方にこうきて居るのでございますが、これを通過交通といたしまして、向洋の駅前から分離いたしまして、此兵器廠の現在の県庁のすぐ南側を通りまして比治山の南を通って現在の市役所の南側に出まして、更に西の方にずっと伸ばしまして、これを幅員四十メートル、両側の部分が三十メートル、こういう風に致しまして東西の幹線としている」（注：この時期の県庁は霞町・現広島大学医学キャンパスにあった）

と、この段階で国道二号線という国土幹線道路の大転換を提起して計画としているのである。その他細かな説明は省くが、当時の県市で練り上げた復興計画の街路について、このような説明が存在していたことを知っておくべきであろう。街路計画を批判するにしてもさらに新たに展開しようというのであっても、当初計画の把握から出発すべきことは論を待たないであろう。



このように図面をイメージしながらわかりやすく丁寧に説明している状況が手に取るよううかがえる。当時の県職員がかくも丁寧にわかりやすく道路計画を説明しているということは驚くべきことであろう。まさに市民レベルにもわかりやすい言葉である。竹重貞蔵がこの街路計画全体をリードしたことは間違いなく、部分的な路線の追加や線形の変更等ではその他の計画者の関与が知られている。

エピソード2

広島市の復興事業としての土地区画整理を東西2工区としたことについて、ほとんど知られていないであろう。このことについて竹重が詳細に語っている。

山口県や長崎県では県（知事）施行であり、大都市では市（市長）施行となっているが、広島のように同一工区を県市で2分して取り組んだ例は珍しい（もしかすると唯一事例かもしれない）。なぜ工区を区分したのかという説明が、戦災復興誌によれば「市としては都市計画は市長の手によって実施さるべきものとして補助金交付を要求したが、容れられなくて東西両分して西部は県知事施行となった」となっているが、竹重は「実際問題として市はもう戦前は全く組織がなかったと、事業もなかった」といい、長島復興局長と取引して「じゃあ県が加勢しましょう」となったという。ただその時、局長は「東部は難しいんだからやりたくないんだけど、難しいところの中心部を県にやってもらうというじゃ私の体面もないから、まあここは市がやるから、西の方を県でやってくれ」となったという。区画整理ということになじみのない方も、東部復興とか西部復興とかいう言葉を聞かれたことがあるかもしれない。現在の平和記念公園の中の広島市レストハウス（建設当時は大正屋呉服店）は当時は東部復興事務所として機能するなど、復興事業が広島を中心部の基盤を整備するという壮大な事業だった。そして県市が協力すれば大きなことができるという教訓であろう。

注1) 戦災復興事業としての土地区画整理は、昭和21年制定の特別都市計画法に基づいて施行され、事業主体は行政庁施行ということで県ではなく県知事であり、市ではなく市長であった。

□ ほっとコーナー ただ、ちょっと『違う場所だった』だけ

読者 井手本 祥子

私には今年4歳になる息子がいます。子どもが生まれるまでは、子育ては幸福そのものだと思っていました。しかし実際は日々嵐のようで、思い描いていた人生とは違うとを感じる時もあります。そんな中、今でも心を支えてくれる大切な詩を紹介します。

『オランダへようこそ』作者はダウン症の息子を持ち、セサミストリートの作家でもあるエミリー・パール・キングスレイ。彼女はよく人から「障がいのある子どもを育てるってどんな感じ？」という質問に対し、ユニークな体験を詩にしています。それを一部紹介します。

赤ちゃんの誕生を待つまでの間は、まるで、素敵な旅行の計画を立てるみたい。

そして、何カ月も待ち望んだその日がついにやってきます。

荷物を詰め込んで、いよいよ出発。数時間後、あなたを乗せた飛行機が着陸。

そして、客室乗務員がやってきて、こう言うのです。

「オランダへようこそ！」

「オランダ!？」

「オランダってどういうこと?? 私は、イタリア行の手続きをし、イタリアにいるはずなのに。ずっと、イタリアに行くことが夢だったのに」

でも、飛行計画は変更になり、飛行機はオランダに着陸したのです。あなたは、ここにいないではありません。ここで大切なことは、飢えや病気だらけの、こわくてよごれた嫌な場所に連れてこられたわけではないということ。

ただ、ちょっと「違う場所」だっただけ。

だから、あなたは新しいガイドブックを買いに行かなくちゃ。それから、今まで知らなかった新しいことばを覚えないとね。そうすればきっと、これまで会ったことのない人たちとの新しい出会いがあるはず。ただ、ちょっと「違う場所」だっただけ。

心の痛みは決して、決して、消えることはありません。

だって、失った夢はあまりに大きすぎるから。

でも、イタリアに行けなかったことをいつまでも嘆いていたら、オランダならではの素晴らしさ、オランダにこそある愛しいものを、心から楽しむことはないでしょう。

思い描いた夢は理想で、それを自分から手を放す勇気を持つこと。失った数だけ新しい夢を見つけられるかもしれない。その為に、今を大切に生きようと感じます。ご興味を持たれた方は、ぜひ全文を読んでみてください。

©1987 BY EMILY PERL KINGSLEY. ALL RIGHTS RESERVED.

翻訳 佐橋 由利衣 Yurie Sahashi

全米ダウン症協会発行の「すばらしい可能性のある未来へ～ご懐妊&新生児のご両親へのガイド」



○ 「時代を語り建築を語る会（第21回）」報告

語り人：多賀俊介氏（広島平和記念公園被爆遺構の保存を推進する会世話人代表）

～原爆資料館に一言 改修工事の進展と今後の課題～

ヒロシマピースボランティアとして原爆資料館をガイドしている立場から資料館の問題点や改善点などを石丸氏と語り合う。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2018年6月29日（金）18:30～20:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：1950年呉市生まれ。広島大学文学研究科地理学専攻修士課程修了。広島市の私立中・高校で社会科地理教員。定年退職後、ヒロシマピースボランティアとしても活動。

☆ 原爆資料館の展示について

- ・東館2階の導入部にある被爆前の風景写真の前で説明したいが、通行の支障となるためできない。
- ・話題のホワイト・パノラマは被爆前と後が連続して表現されるので、分かりやすいが、ガイドの側からは短時間のため説明しにくい。
- ・メディア・テーブルはタッチパネルで検索できるため子供たちには好評だが、要点を説明した周囲の壁面パネルが見逃されている。

☆ 原爆資料館の展示システム

- ・全体的にコンピューターに頼り過ぎの感あり。検索することにより多くの情報が入手できるが、大事なポイントが伝わりにくい。もう少し人間的な手法を取り入れてホッとしたりハッとしたりする方がよい。（石丸）
- ・資料は収蔵庫に満杯なので、館外貸し出しや海外展示に積極的に取組めばよい。（石丸）

☆ 原爆資料館の管理運営について

- ・エキスを展示した本館のみを有料にし、東館は自由に出入りでき平和学習ができるようにと資料館展示検討会議で提案したが不採用。ミュージアムショップも拡張して平和関連の本やものを充実させ、そこに行けば入手できるようにすればよい。（石丸）

☆ 被爆体験の伝承の仕組み

- ・どの被爆者の証言を伝承するかは選択でき、その証言をベースに伝承することになるが、どうしても伝承者の主観が入る。どこまでが真実かわからない状況で伝承が独り歩きする危険性があるので、チェックシステムが必要と思う。
- ・市民の前で伝承者仲間が意見交換し、伝承の難しさを理解し合えばよいのでは。（石丸）
- ・本来は被爆者の証言ビデオを多くの人に見てもらいたいだが、ビデオコーナーが奥の方にあり、素通りされている場合が多い。見ている人も外国人がほとんどである。

☆ 平和記念公園の被爆遺構の保存

- ・被爆遺構は掘り出された場所に展示するのが一番インパクトがあるが、なかなか難しい。長大岡河先生による灯籠流しをイメージした展示ケースの提案もあるが、認知されていない。
- ・元住民の希望により敷地跡を発掘したが、その被爆遺構は誰のものか？個人のもの？公園を所有する広島市のもの？それとも世界の人々のもの？
- ・被爆遺構の存在を後世に伝えようと「広島平和記念公園被爆遺構の保存を推進する会」を設立。会からの幅広い議論の要請を受け、市は専門家や市民団体などから意見を聞く懇談会を設置。被爆前の街並みを十分に考慮して発掘場所や遺構の保存・展示方法を検討する。

☆ 会場からの意見

- ・無料ガイドや伝承講話など来館者へのお知らせ看板を玄関に置いていたが、今は電子看板に置き換えられた。順次多くの情報を提供できるが、立ち止まって見ないと伝わらない。
- ・被爆時の惨状を示す資料展示に重きが置かれているが、復興中の姿や今後の課題など未来志向の資料も充実してほしい。丹下健三氏のいう「平和を作る工場」の機能も大事。
- ・原爆資料館の展示を見た後は、もやもやした気持ちが残るのが自然。展示だけでなく、いろんな人との対話などの中で、もやもや感を醸成できないか？
- ・最後に、参加者は資料館への要望・提案などを付箋に記し、分類された建築、展示、維持管理・運営、被爆遺構の項目に張り付ける。石丸氏が整理して資料館の方に提出する予定。

（編集委員 瀧口信二）

○ 人物登場：山崎 学氏 (空の下おもてなし工房 代表理事)

取材場所は元安橋脇のカフェテラス。仕事帰りによく立ち寄るということで、川の風が心地よい。周りは外国語交じりのおしゃべりが飛び交う。

☆ これまでの軌跡

呉市生まれ、育ち。大学卒業後、広島市役所に就職。最初は営繕畑で、市の施設の設計などを担当したが、次第にまちづくりの方にシフト。

都市計画課時代に地区計画の検討が始まり、各地域住民との関わりを持つ。佐伯区の建築課時代に商店街による「コイン通りまちづくり委員会」が立ち上がり、以来20年の付き合い。役所を離れてからも続いている。

まちづくりは人にやらせるのではなく、現場から自ら立って考えるというのが基本的スタンス。

☆ カフェテラス倶楽部結成

平岡市長時代、市の中で平和大通りの活用策を考えている頃、ある人からカフェテラスをやらないかと誘われ1995年にカフェテラス倶楽部を結成。公共空間にカフェテラスを並べて広島らしい風景を作りたいという共通認識があった。今も第3土曜日に平和大通りのANAクラウンプラザホテル前緑地で開き、求めに応じて出張カフェテラスも行っている。

広島は戦災復興計画で土地区画整理が進み、良質な公共空間が増加。特に河岸緑地がよく整備され、河川空間の利活用に向けた社会実験として実施した水辺のカフェテラスが好評。広島の河川区域での利用が認知され、今や河川法を改正して全国に適用されている。

河川の動きが道路にも波及し、条件が揃えば路上にカフェテラスが認められる時代になった。ホテルなどの1階にレストラン等を開き、その前の公共空間に張り出す形でカフェテラスを構えている風景をよく見かける。

☆ 雁木組とポップラ・ペアレンツ・クラブの活動

広島はデルタの街で水の都と呼ばれて久しい。河岸緑地の緑道計画延長は約48Kmあり、現在も整備中。2003年に「水の都ひろしま」構想が策定された後、水上タクシーを運営するNPO法人雁木組や基町の河岸緑地を管理するポップラ・ペアレンツ・クラブ(PPC)などの活動にも参加。PPCが今年8月18日に行う野外上映会は「この世界の片隅に」を上映。片淵須直映画監督も登場する予定なので、話題になりそう。

☆ 空の下おもてなし工房設立

2015年、カフェテラス倶楽部結成20周年を機に「空の下おもてなし工房」を設立。まちづくりを始め、社会に貢献する市民団体の一層の活発化に向けてネットワーク構築と相互支援を行うこと、更に自らもみんなが活動するこの空の下を生き活きと楽しくするために社会貢献活動を行うことが設立趣旨である。自立した活動をするため収益事業も行うが、手続等が簡便で自由度の高い一般社団法人にしている。ホームページはまだ本格稼働していない。

☆ 「ひろしま地歴ウォーク」出版

空の下おもてなし工房の一番大きな事業が「ひろしま地歴ウォーク」の出版。本は多様な顔を持つ広島を「デルタの街」「広島歴史」「廣嶋」「ヒロシマ」「カープの街」「ひろしま」の6つのテーマに分けて街の魅力を紹介。広島地理教育研究会のメンバーを中心に15人の専門家が執筆。「自費出版は採算がとれない」が出版界の常識だが、本をベースに街歩きを企画し、本の売り上げを促進したい。まずはカープの街をテーマに必勝祈願をしながら歩いてみたい。



☆ これからの抱負

カフェテラスを始め、これまでやってきたことを継続させること。今やっていることに社会的責任があり、自分がやれなくなっても次の人に引き継げるようにしていきたい。

コメント

市役所時代から役人の枠にとらわれない生き方を選択し、今も助成金に頼らない市民活動を目指すたくましい人だ。世の中が元気になるためにも後続の人材が次々と輩出してほしい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二 (文責)



略歴：1954年、呉市生まれ。1978年九州芸術工科大学芸術工学専攻科修了後、広島市役所勤務。2014年退職。現在、広島市産業振興センターデザイン支援室室長。1995年カフェテラス倶楽部結成。2015年空の下おもてなし工房設立。

とうかさ

一般社団法人 公共建築協会中国事務局長 河村美彦

広島に夏の到来を告げる「とうかさ」。市中心部の中区三河町 福昌山 慈善院 圓隆寺で開かれる稲荷（とうか）大明神のお祭りで、江戸時代初期（1619年）の圓隆寺の建立と同時に開山、来年400年を迎えるとのこと。また、「とうかさ」は、翌年の5月に始まったという歴史ある祭りです。

「とうかさ（とうかさ大祭）」は、「すみよしさん（住吉神社まつり）」、「えべっさん（えびす講）」と並ぶ広島三大祭りで、「とうかさ」は、かつては旧暦の端午の節句に開催されていたとのこと、1998(H10)年からは毎年6月第1金曜～日曜日に、「すみよしさん」は7月下旬に、「えべっさん」は毎年11月18日～20日に、それぞれ開催されています。

「とうかさ」初日の6月1日（金）夕刻にお参りしましたが、歩道には昔懐かしい射的、金魚すくい、いか焼きなどの露店が軒を連ね出ており、呼び込みも賑やかに祭りを盛り上げています。

「とうかさ」は、別名「浴衣の着初めまつり」ともいわれ、広島ではこの日が浴衣の着初めの日とされており、浴衣姿でお参りする人も多くみられます。「とうかさ」参拝記念は、破魔矢ならぬ破魔うちわで、境内では、破魔うちわを持った「うちわ姫2018」が出迎えてくれました。



うちわ姫



ゆかた姿



金魚すくい



歩行者天国



パフォーマンス

* 筆者撮影

「とうかさ」開催にあわせ、2003(H15)年からは本通りなど市中心部では「ゆかた」をテーマにした市民参加型のお祭り「ゆかたできん祭」も行われており、「ゆかたパレード」など、浴衣に因んだ様々な催しが行われています。

圓隆寺に近い中央通りは19時～22時の間は歩行者天国となり、道路上の特設広場の4つゾーンでは、歌謡ショー、ヒップホップダンス、和太鼓演奏など路上パフォーマンスが繰り広げられています。

かつて、「とうかさ」、「えべっさん」といえば、心ない一部の若者のバイク等による迷惑な“路上パフォーマンス”もみられましたが、中央通りから一時的に車両を締め出し、市民が演者として参加できる場を設けたことで、市民にとってより身近な祭りとなっているようです。

この時期、圓隆寺への参拝者は約8万人、「ゆかたできん祭」を合わせると、45万人の市民などで賑うそうで、市民による市民のための祭りとして息づいているようです。

まもなく夏を迎える広島ですが、これらのまつりは季節の歯車をコトりと回す役割も担っているようです。

○ 広島市中央公園を考える⑤ 旧市民球場跡地の空間づくり（広島市平成27年）

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、前号で紹介した「旧市民球場跡地の活用方策」（平成25年3月）を基に、市の方で施設の規模・配置等を検討し、概略のスケッチを公表した「旧市民球場跡地の空間づくりのイメージ」（平成27年1月）について紹介する。

旧市民球場跡地の空間づくりのイメージ

サッカースタジアム建設の検討協議会は平成26年12月の最終報告書で候補地として球場跡地（中区）と広島みなと公園（南区）を併記。27年4月の市長選では当時サンフレッチェ広島社長が立候補して球場跡地を強烈に推し、松井市長はこのイメージ案をもって迎え撃った。

< I > 前提条件の整理

(1) 旧市民球場跡地の活用方策

- ア 球場跡地に導入することが望ましい機能は「文化芸術機能」と「緑地広場機能」を中心とする機能及びこれらを補完する機能とする。
- イ 3つのエリア設定と機能の配置
 - (A) **緑地広場エリア**：イベントもできる緑地の広場を確保し、天候等に左右されることなく市民や来訪者が集い、憩える空間となるように屋外活動用の施設を配置する。
 - (B) **文化芸術エリア**：青少年センターの移転を念頭に、文化芸術を発信する施設を整備し、その発信力の強化につながる生涯学習・教育機能や創作機能等の導入を検討する。
 - (C) **水辺エリア**：基町環境護岸との連続性を保ちつつ、市民や来訪者が憩える「水の都ひろしま」を象徴する場として整備する。

(2) 計画地の立地特性と課題

- 特性1** 中四国最大の商業業務地である紙屋町・八丁堀地区に隣接。計画地のポテンシャルを生かしたにぎわいの創出が求められている。
- 特性2** 戦後の復興のシンボルであり、都心部の緑豊かな空間として整備された中央公園に立地。市を代表する文化施設が集積しているが、中長期的には建替や再配置を行う必要あり。
- 特性3** 平和記念公園に隣接。世界遺産の原爆ドームの緩衝地帯に当たり、景観に配慮が必要。
- 特性4** 美しい水辺空間に隣接しているが、十分に生かされていない。



イメージ図

< II > 計画づくりの基本的な考え方

(1) 検討の視点と目指すべき姿

市民が「世界に誇れる空間」を目指し、都心の新たなにぎわい拠点の創出、中央公園全体の機能強化、平和記念公園と一体となった空間づくり、基町環境護岸との一体的な活用などを図る。

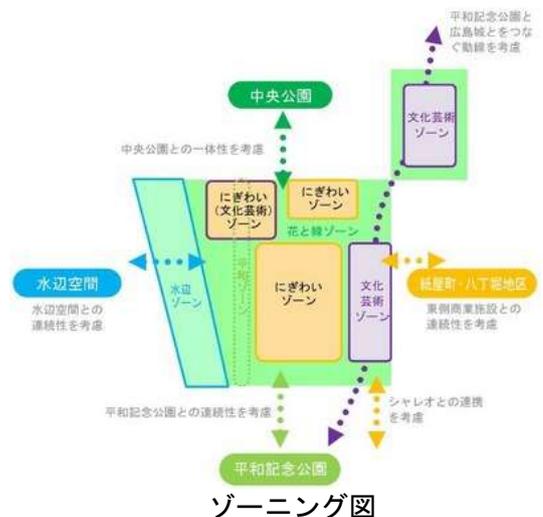
(2) 空間づくりの基本的な考え方

にぎわい：多様な人々が交流できる空間

様々なイベントの開催により、にぎわいを創出するゾーン

花と緑：花と緑にあふれる美しい空間

計画地全体を網羅するゾーン。花と緑にあふれ、憩いとくつろぎの場を提供するゾーン



ゾーニング図

平和：平和記念公園とのつながりを考慮した空間

南北の軸線を考慮し、世界遺産周辺の品格ある雰囲気にもふさわしいゾーン

水辺：水辺空間とのつながりを考慮した空間

「水の都ひろしま」の新たな観光スポットとなる水辺空間と一体となった魅力的なゾーン

文化芸術：文化芸術を発信する空間

広島文化芸術を振興・発信するとともに、平和記念公園と広島城とをつなぐ動線の強化にも資するゾーン

<コメント>

5つのゾーンに整理した空間づくりの基本的な考え方はよいとしても、球場跡地に全部を盛り込むのは窮屈さを感じる。この考え方を中央公園全体に展開させて周辺との調和を図ってあげれば、望ましい姿が見えてきそう。

約1万人収容の屋根付きイベントひろばが一つの売りになっているが、エリアが狭く、かつ限定され過ぎているので、多様なニーズに対応できるフレキシビリティに欠けている。

東側に位置する文化芸術施設はイベントひろばを狭め、基町クレド側との関係を遮断しているので、球場跡地外に移した方がよい。

メインプロムナードも平和の軸線を強調するあまり、賑わいゾーンと水辺ゾーンを分断している。もう少しあいまいな空間にして、どちらのゾーンにも含まれる方が望ましい。

今回の提案は、旧球場跡地検討委員会の報告を受けて市の中でまとめたものであるが、基本的条件を整理し、それに基づく提案を広く公募して実現に向けた歩みを進めてもらいたい。

(編集委員 瀧口信二)

(参考資料)

「旧市民球場跡地の空間づくりのイメージ」：www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1420784208990/index.html

○お知らせ：第4回 響け！平和の鐘 祈念式

～みんなで最古の「平和の鐘」を打ち鳴らそう～

◆ 開催の趣旨

広島市中央公園に、現存する最古の「平和の鐘」がひっそり佇んでいます。この鐘は、昭和24年(1949)被爆の焼け跡から集めた金属を溶かし込んで鋳造し、広島銅合金鋳造会が広島市に寄贈したものです。

しかし、その年の第3回平和祭で一度鳴らされただけで、永く忘れ去られていました。私たちは被爆70年を機に、毎年8月6日この鐘を撞く活動を始めました。

参加者全員が鐘を撞き、原爆死没者の慰霊と核兵器も戦争もない世界の実現を願います。



緑井村の鋳物工場にて、
やっと完成し喜びに沸く

◆ 祈念式の概要

① 日時 平成30年(2018)8月6日(月)
午前9時30分～10時10分(雨天決行)

② 場所 中央公園・ハノーバー庭園の南広場

③ 主催 響け！平和の鐘 実行委員会

④ 式次第
・あいさつ ・黙とう
・「ひろしま平和の歌」合唱
・こどもの言葉
・「平和の鐘」各代表者が点打
・「鐘よ、平和の鐘よ」合唱
・「平和の鐘」点打(約20分間)

参加者全員が順番に鐘を打ち鳴らす



順番に鐘を打ち鳴らす
祈念式参加のみなさん

◆ 市民参加

祈念式には誰でも自由に参加できます

(参加者全員に祈念式冊子を配布します)

◆ 連絡先など

TEL 090-8604-7833 (高東) URL <http://hiroshima-peacebell.org/>

□ 編集後記

6月12日、世界が注目する中で初の米朝首脳会談が開催された。北朝鮮の非核化と体制の保証に向けて大筋の合意がなされたが、具体化の目途は立っていない。これからの推移を注意深く見守っていかなければならない。

そんな中、サッカーのワールドカップ・ロシア大会が開催され、侍ジャパンも予選リーグを突破して決勝リーグに進出し、日本中が大いに盛り上がった。スポーツの祭典は心を豊かにしてくれるし、また平和でなければ楽しめない。2020年の東京オリンピック成功に向けて世界の平和を追い求めていかなければならない。

8月11日に旧広島市民球場跡地で「ひろしま盆ダンス2018」が開催される。被爆1年後の夏に「戦災供養盆踊り大会」がこの地で開催され、その後も球場ができる頃までは盆踊りが行われていたという。

「原爆死没者を悼み、復興に挑んだ人々の営みに思いを馳せながら、参加者が世代や国境を越えて平和を体感する新たな集いの場を創出しよう！」と中国新聞社が市民団体などと呼びかけている。

盆踊り大会は各地域でも開かれているが、この「ひろしま盆ダンス」は国内外からの観光客も気楽に参加できる。市民のみんなの力で成功させ、広島的一大イベントとして世界の平和を発信する場となることを期待したい。この地に最もふさわしいイベントの一つと思う。

その際、今の閉鎖的な仮囲いは撤去し、可動式の大型プランターを用いて敷地利用に合わせて自在に調整できる境界にはいかがであろう。実は、このアイデアは2011年に開かれた被爆100年広島市中央公園アイデアコンペで「可動式花壇」として提案されたものである。
(編集委員 瀧口信二)

お悔やみとお見舞い、そして反省と課題

7月4、5日から7日未明までの西日本集中豪雨によって、大きな被害を受けられた方々に対して、衷心よりお見舞い申し上げます。お亡くなりになられた方にはご冥福を祈るばかりです。特に行方不明とか安否不明の方が多かったということで、現代都市が如何にもろい基盤の上に存在していたのかを露呈してしまいました。

今回、多くの河川が氾濫し、また各所の山際で土砂崩れが発生しました。流れ着いた立木や土石も二次被害を拡大しました。さらには道路や鉄道などの交通網の寸断や、停電や断水などライフラインへの大打撃は、生活への著しい悪影響を及ぼし、流通や生産など産業をも阻害するという事態を引き起こしたことになります。これが長期に及ぶなら、その被害の甚大さは計り知れないものとなります。少しでも早い回復を祈るばかりです。

今回、連続して500ミリ、600ミリと著しい降雨があり、予想を超えた事態であったことは確かですが、4年前の安佐南区、安佐北区の大規模土砂災害の体験が生かされたのかどうかという問いは、まちづくりや国土計画に関わる立場の身には厳しく降り懸ってくるでしょう。降雨は仕方なかったとはいえ、安全対策や避難のしかた、あるいは災害後の危機対応など、かつての災害体験から多くを学んで生かしたのでしょうか。

多くの課題に取り組まず、抜本的対策を放置したままのように思えます。行政もかつての大規模開発といった都市構造を大転換するような目立つ大事業ではなく、きめ細かな防災対策、安全対策が今こそ渴望されているはずです。
(編集委員 石丸紀興)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表